

# 明暗

水野 仙子

『街にゆかばや、街にゆかばや。』と文學的の言葉をもつて國子の心は呟いた。

『そは……なるが故に。』と猶もその心を文章語に綴らうとした時に、また暗い道の小石に當る下駄の音がしたので、はつとして心の耳を聳そはたてた、突き當りの端はづれの家のこゝまで近づいて來る足音に、いよ／＼胸の鼓動を高めて行つた甲斐もなく、ひたとそれが止るべきところでないところ止つた時に、國子の心はがくりと頹くろれたやうな氣がした。どうした人か、暫くするとその足音はもと來た方へと引返して行つた。

『街にゆかばや、街にゆかばや。』とまた忙せはしく國子の心は繰り返した。

街に住めば、その灯と、どよみと、織るがやう

に往き交ふ下駄の音とに紛れて、かうまで神経が鋭くなりはしなからうにと考へられたので、神経が丁度薄い金の延のべ金のやうになつて、その尖端さきに觸れた一寸した物音にも、直ぐにびり／＼と慄えて傳はつて來るやうだ。停車場を出る甲武線の電車の音、遠くの／＼通りを流して行く按摩あんまの笛、人力車の轍わだちの後にいつまでも吠え續ける犬の聲、かと思ふと時たま足音がこの横町に近づいて來る確かにさうぢやないと思ひながらも、その度にどきりとするこの夜の世界には夫の足音でない足音がみんな絶えて了へばい／＼と國子は思ふ。

二人の天使がさも重さうにもちあげてる置時計が、チクタク／＼と國子の胸を刻んで行く。その針の先ほども間違はない規則正しさが腹だ／＼しいそれに、じつと耳をすまして居ると、いやに耳につくその音に、なんだか呼吸いきを計られてるやうで息が苦しくなつて來る。で唇を噛みしめて暫く息を殺して居ると、セコンドの小刻みは一頻りづうつと調子を低めて行つて、また浮きたつたやうにチクタク／＼とすまし込んで歩いて行く。幾度試してみてもその調子があるらしい。それが心ある

囁きのやうにも思へて、國子は暫くその試みに紛れて居た。

いつの間にか十一時近くなつて居る。一度極度に達して通り過ぎた空腹がまた甦つて來た。ちやぶだいの上に向ひ合つた食器が、冷え切つた薬を盛つて眞白な拭巾を頂いて居る。もう今まで夫が何も喰はずに居る譯がないとは思ひながら、今は意地になつて喰べやうとは思ひないのである。さうでない、今まで待つたといふことが無駄になつてしまふやうにも思へるし、さうして待通したといふことを、夫に氣の毒がらせてやらなければならぬ——。

本を讀むでもない。お針をするでもない待つ間の長いこと。當り前に歸ることと思つたので、十分待ち、二十分待ち、それから一時間——二時間——もう途中からは、何をする氣配りもない。待つのが一つの重大な仕事である。

玄關の格子を開けると、眞暗な闇の一つの部分が出、門の戸に手を掛けると、隣りの犬が聞耳をたてたらしくうゝうゝと云ふ。それに聞かせる何

氣ない足音にして、横町の角に立つて通りを眺める。赤十字病院の塀に添つた暗い道には、微かに一つ二つの燈が見えるだけで、暗に働く人らしいものゝ影もない。夜更けに近い風の冷たさが、脇の下を潜つて背のあたりに散れて行く。

可なり離れてあるところの湯屋から、風の加減かで二つ淋しい拍子木が鳴つた。ふと緩い足音が聞え出したので、凝乎と目を見据ゑて居ると、やがてぶらりと蕎麥屋の出前持の提灯が見え出した。その赤い灯が、ゆらりと眞黒な人影を導いて近づいて來る。

國子はさびしく諦めて家の中に入った。勢ひよく門の戸が開いた時に國子は弾かれたやうに起上つた。暗い玄關のたゞきに眼鏡光つたその息づかひがと國子の顔近く寄つた時に、殆ど本能的に國子は身を退つた。そしてさすがにはつとした。

茶の間の仕切りを塞いだ廻し戸がギイと引かれると、ぱつとさす光りに少し鼻白んだ夫の顔が國子をちらつと見た。

『待つた？』

『……』國子は黙つて首を下げる。

『濟まなかつたね。』

『御飯は？』とわざとかう聞く。

『濟んだ。くんちゃんは？』

『まだですよ。』と言葉が改つて居る。

『さう、ぢやお腹が空いたらう、先に喰べてりやいゝに。』

その調子に、濟まなかつたといふよりは、困るなあ、何故そんなことをするんだらう！といふやうな調子を含んでるのが國子には物足らない。

『もう遅いから明日にしませう。』とちやぶだいを押しやつて、夫が少し手持無沙汰にまだ立つて居るのに氣がつくと、

『何處に寄つてらしつて？』と目を伏せたまゝで聞く。

『田村君とこさ。』と夫は薄笑ひしながら言つていきなりそこに兩足を投げ出した。

『そして淺草へ行つたんでせう？』

國子にはそれは皮肉のつもりで出た言葉であったが、夫は如何にも無造作にぼくりと首を下げた『椿姫を見に行つたのさ。サラベルナールの』

國子はふと、夫の背後にパツとした光りと音響の街を見るやうな氣がした。そしてあの蕎麥屋の赤い提灯が、ぶらり／＼と歩いて居た通りの暗い闇を再び思ひ泛べた――。

【入力者注】底本と行を合わせるために、フォントサイズを小さくしたり、半角スペースを挿入した箇所があります。

底本…「處女」大正二年九月一日第一號發行

テキスト入力…小林 徹

公開…令和六年四月七日

リンク…「[作品年譜](#)」

[水野仙子ホームページ](#)